

## 17. 当院における過去12年間の高圧酸素治療の状況

齋藤憲輝 津田一男 長谷川敏久  
岡崎直人 佐藤 暢  
(鳥取大学医学部附属病院麻酔科)

我々の大学に高圧酸素治療室が開設されて、実際に治療を開始した昭和50年1月より昭和61年12月までの過去12年間に高圧酸素療法が施行された症例に関して、年次別、疾患別にまとめたので報告する。

使用した高圧酸素治療装置は昭和50年1月から昭和58年2月までは高圧酸素治療装置 RHS-3 型(ヴィッカーズ社製)で、それ以後 KHO-200 型(川崎エンジニアリング社製)に変更された。

治療症例数は183例で、うち救急治療症例は46例。性別にみると男性126例、女性57例でほぼ2:1となる。加圧方式については157例は酸素加圧方式であったが、空気加圧を併用したものが26例あった。年齢は生後1歳の低酸素性脳症患者から93歳の腸閉塞患者におよび、平均48.7歳。延治療回数は3070回で、最低1回から最高はスモン病で157回の治療を行った症例があった。1症例あたりの平均治療回数は16.8回。疾患別にみると非救急的適応では突発性難聴が34例ともっとも多く、救急的適応では一酸化炭素中毒が21例ともっとも多い。疾患別で平均年齢がもっとも高かったのは動脈硬化性動脈閉塞症の63歳で、もっとも平均年齢の低かったのはガス壊疽の39歳。疾患別平均治療回数のもっとも多かったのはスモン病の52.8回、もっとも少なかったのはガス壊疽の6回であった。1回あたりの平均治療時間のもっとも長かったのは減圧症の136.7分、もっとも短かったのは低酸素性脳症の72.8分。

最高圧力の平均がもっとも高かったのは、減圧症の2.8ATAに対し、もっとも低かったのは多発性硬化症の1.99ATAであった。

## 18. 高気圧酸素療法における OP-1206・ $\alpha$ -CD 併用の効果

齋藤祐二 山崎 実 木谷泰治  
渡辺久志 加藤清司 藤田達士  
(群馬大学医学部麻酔蘇生学教室)

バージャー氏病(TAO)や閉塞性動脈硬化症(ASO)などの四肢慢性動脈閉塞症に伴う虚血性潰瘍や、内耳の循環代謝異常が疑われる突発性難聴(SD)に対し、交感神経節ブロックと高気圧酸素療法(HBO)を中心にした治療が行われている。さらに最近では Prostaglandin E<sub>1</sub> (PGE<sub>1</sub>) 点滴療法を追加した治療法の優れた成績が報告されている。しかし PGE<sub>1</sub> は血管内投与でしか用いられず、これら末梢循環障害疾患の多くが慢性の経過をたどることを考えると、経口投与で PGE<sub>1</sub> 様製剤の出現がまたれており、OP-1206・ $\alpha$ -CD はこの目的に沿って開発された薬剤である。我々は今回、高気圧酸素療法患者における本剤の末梢循環動態に及ぼす影響を四肢皮膚温変化および高気圧酸素負荷時の分圧測定(tcpo<sub>2</sub>)により検討したので報告する。

**【対象と方法】**対象は当科を受診した Fontaine 分類 I~III の TAO 患者7名と四肢循環障害のないことを確認した突発性難聴患者7名である。日本電気三栄の Thermo tracer type 6T66 を使用し、各投与前後の皮膚温変化を経時的に測定し温度変化の値を求めた。また 2ATA 酸素吸入時の tcpo<sub>2</sub> の変化を測定した。

**【結果と考察】**SD 症例では、手背以外の皮膚温上昇は漸増傾向を示し 20 $\mu$ g で有意な上昇を認めた。TAO の皮膚温変化は、全投与量で漸増効果を示し180分後も有意な上昇を示していた。用量依存性効果は示さなかったが 5 $\mu$ g 投与で最大の上昇を認めた。tcpo<sub>2</sub> の変化も同様であった。副作用などを考えると臨床量としては 5~10 $\mu$ g が適当と思われる、新しく開発された経口 PGE<sub>1</sub> 薬の末梢血管拡張による皮膚温上昇には交感神経系の反射機転が働き末梢血管拡張効果は減弱されるが病的血管では血管拡張作用を受けやすいと思われる。また持続時間は180分以上はあり、交感神経ブロック効果を一層著明にするので、HBO 療法の併用薬として特に有用と思われる。